

N K H

長岡市立科学博物館報

No. 21 1971





解説ノート（14）

青白く発光するツキヨタケ

おもにブナ、ときにカエデ、トドマツなどの枯藪に発生するキノコで、暗い所では発光する。1970年10月16日悠久山着柴神社本殿前の枯れたモミジの木に着生しているのを撮影。方法は、まず三脚を固定し被写体に光をあててピントを合せ、その後開放で時間をかけた。フィルムはカラー（ネガテブ）。白黒（タクマーX）を使用。シボリ5.6で時間は30・15分の3回行なったが、カラーはいずれも失敗し、白黒は美しく撮影できた。

撮影者森田和也（長岡市台町2丁目）シボリ5.6、時間15分。（西山）

表紙デザイン 本間正三

N K H

21号
1971年9月

目 次

隨 想

- 自然のしきみ 松崎庚一 1

調査研究

- 中蒲原郡小須戸町矢代田採集の縄文前期初頭の土器 駒形敏朗 2～3
“渡り”の意味 柿沢亮三 4～5
小木ノ城の昆虫（2） 昆虫相をしらべる会 6～8

千羽元一先生を偲ぶ

- 略年譜 9
人鳥一如 千羽元一先生 柏木久米雄 9
千羽元一氏の死去に憶う 中村孝三郎 9

あとがき

表紙裏

表 紙 写 真

吉野屋の土偶：表紙の土偶は、南蒲原郡吉野屋の工場敷地の工事現場からの出土物。顔の長さは42mmの長菱形を呈し、後頭部は越後の縄文中期土偶特有の孟形で、その周縁には花弁状の刻目が装飾され、六つの小孔が施されている。T字形の貼りつけ眉と鼻は接続し、目も細紐状の粘土のはりつけである。ほおのふくれた凹顔人種形に属し、鼻と口の間は顔面全長の $\frac{1}{3}$ という1cmの間隔をもった性別不詳の縄文時代の「鼻下長」族のどかな顔相であるが、当時の作者周辺の実在人物を形どったように考えられる。

（考古研究室、中村孝三郎）

中蒲原郡小須戸町矢代田採集の縄文前期初頭の土器

越後古代研究会員 駒形敏朗

この遺物は中蒲原郡小須戸町矢代田の東山丘陵の北端近くの通称八海山から岡田辰一氏によって採集された。八海山にはまた、円塚遺跡という古墓がある。信越線の矢代田駅を眼下にのぞむ、西に面している比高約10mの丘陵の突端に位置し、近くに国道新津・三条線が走っている。丘陵の背後には油田地帯を控え、前方には信濃川が流れている。現在遺物が採集された地点は工事のため

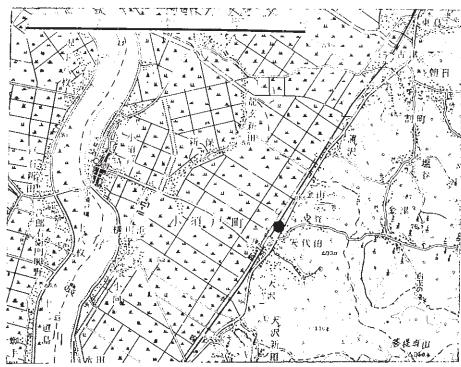


図1. 採集地 (●印が遺物採集地点)

に崩壊している。

1. 口縁部の破片。縄文原体はRLであり、縄文の条は浅い。胎土には少量の纖維の他に石英、金雲母(黄銅鉱)等が含まれている。とくに金雲母は多量に混入され、土器表面はキラキラ輝いている。土器表面には炭化物が付着している。火がとおったためか、亀裂が内外面に走っている。

2. 原体の短い撓りの違うLRとRLの縄文を下から順に施していく、それらが羽状縄文を形成している。縄文の条は1同様浅い。胎土にはやはり少量の纖維および、金雲母の含有が多く、石英等の砂粒も認められる。土器は1同様亀裂が土器内外面に走っている。

3. RLの斜行縄文。縄文の条は1・2に比して多少深い。胎土には少量の纖維および、石英等の混入がみられる。土器の焼成は良好。内面には土器成形の際のさつ痕が認められる。

4. RLの縄文原体を回転させた縄文で、原体の端を利用してのループ文が認められる。拓影では上方である。縄文の条は他の土器よりもかなり深い。胎土に纖維および、石英等の砂粒が混入されているが、金雲母はない。土器の焼成は良好で堅緻。

5. 本遺跡採集の唯一の土製品である。表面には磨滅のためにかすかではあるが縄文の圧痕が認められる。形状は孔があけられているカーブの下の部分が剥落している他、全辺にわたって整形されている。胎土には纖維に加えて、石英等の砂粒も含んでいる。この土製品ももうくこわれやすい。

以上簡単に上器を一片一片について述べてきたが、これらから次のことが考えられる。

以上1~4について3を除きRLの原体である。

胎土には全て纖維および砂粒を多く含む。とくに1・2には金雲母が認められる。

これらの土器片は今まで述べてきたことから縄文前期初頭に属するものであろう。また5の土製品がこれらの土器に伴った可能性は考えられ、この時期から出土したということはあまり聞かれない。今後の報告を待ちたい。

この土器が県内のどの遺跡に共通するか類例を求めるならば次の遺跡がある。

西蒲原郡卷町布目遺跡(上原甲子郎1956)は昭和28年土地改良工事によって発見された。土器は纖維を含み、原体の短い縄文が施文され、器型が丸底の深鉢を呈している点などから関東の縄文前期初頭の花積下層式に比定され、布目式土器と呼称されている(註1)。

東蒲原郡上川村室谷洞窟(中村孝三郎・小片保1964)からは人骨の頭部と肩および腹等を被覆していた花積下層式土器がある。室谷洞窟からは花積下層式土器の他、関山式土器の出土がみられる。

刈羽郡刈羽貝塚(清野謙次1928・1969 八幡一郎1958)出土の土器は関東の前期前半の黒浜式に比定され、八幡博士により刈羽式と命名されている。

西蒲原郡卷町前表遺跡(上原1956)からは刈羽式と思われる羽状縄文の土器片が採集される。

西蒲原郡卷町重稻場遺跡(上原1956)からは前表遺跡と同一の含纖維の土器が発見されている。

長岡市金倉遺跡(中村1966)からは羽状縄文の施された刈羽式土器が採集される。

中頸城郡松ヶ峰湯の沢Bトレント(室岡博1966)では関東の諸磯式および黒浜式に相当するものが混在している。

以上報告されている遺跡の他、関山系土器が中魚沼郡はじめ各地に点々と若干の遺物が採集され、黒浜類似形

自然のしくみ

松崎 康一

私たちの生活に關係のある地球はごく地表の浅い処までで、岩石圏である。地表は凸凹にとんでいて、凹處に海や湖沼として水が溜っていて水圏をなし、これらを取りまく厚い大気の層を気圏とよんでいる。生命現象はこの3圏にゆだねられているので、3圏を生命圏と云われている。

これらそれぞれの圏は、いずれも深い關係をもちながら、長い間にはかなりの変化をしてきている。自然の形態を変化させてゆく原因の第1は、風や雨や雪などの作用によって削剥が行われ、砂や礫が生産されて平地に運搬され、堆積して平野を造る作用である。この作用は、大気の動きの結果としておこる変化で、地表がうける太陽の輻射エネルギーに基くものであり、外因的營力とよばれている。第2には、土地の昇降、地震、火山等の専ら地表の姿を凸凹化してゆく内因的營力であって、これら第1、第2の營力は、地球創成時からのもので、寧ろ今日の地表の姿こそ、この2つの力の相克の歴史であると云ってもよい。

これは太陽の輻射エネルギーとは全然無縁な力である。第3には、第1、第2とは全く異った工業エネルギーとでも云うべきものであろう。このエネルギーは観光とか、人工的快適環境の造成とか、私たちの生活にだけ関係する作用なのでいろいろの問題が生じている。

工業発達の初期では、自然から次々に収奪したとしても、自然の規模がはるかに大きいために、公害や汚染を飲み込んでしまっていたが、今日では、煤煙による気圧の汚れ、工業・冷却用水、天然ガスの採取等で岩石圏の地盤変化があつたり、樹木の乱伐によって上流からの土砂流量が多くなって天井川を作り、氾濫の災害をもたらしたり、水圏が汚れて問題になったり、全くそれらの例枚挙に事を欠かない。

自然科学は決して大自然そのものではなく、自然を対称とする科学であり、自然の中の秩序ある体系をうつし取ることを目指しているものである。自然科学発祥の初期は、自然は一体であつてあらゆる自然の事象は互に関聯し合っているから、自然の研究に分科はなかったが、次第に自然の内容の増大とともに、それぞれの領域をもち特質的な性格をもつた諸分科に分れた。そして今日又

環境科学の如き統合のきしが見えて来た。

自然科学の成果が自然を理解し、自然のしくみや法則を知り得る手段としてなした功績は偉大なものであった。自然の法則を無視して人間社会の慾望だけの方向に自然の開発と云う言葉で使われた時、自然は尽きない恩恵どころか災害と云う報復手段で答えてくるものである。

自然は又地殻進化と生物進化の歴史過程であると云つてもよいだろう。その歴史の1つの柱である生物は、幾らかは個々の行動において計画的動作をとり得るとは云え、その殆どは外界から与えられたいいろいろのものだけを利用することによって生存しているものと解してもよいであろう。よって、今日生物の生態や生存変化の顯著さは、即自然破壊が進んでいると云うカルテと見做してよい。

同じ生物学的存在の人間は自然の一部であり、只生物として存在するだけでも何等かの変化を与えるものであるが、人間の今日的存在と云うものは、単なる生物学的存在と云う感覚からくるような消極的なものとは全然違つたすべて自然破壊につながると云うイメージの強いことは誠に残念なこと、云わねばなるまい。私たちは兎角自然と人間が対立しているかの如き関係で、自然を改造開発したつもりになつたり、單に自然の破壊を嘆いてゐるが、これは結局自然だけの破壊でなく私たちの未来を描いた今日の姿であることを知る時慄然とするものである。

人間と自然は支配と服従の縦の結びつきの関係ではなく、協同と共存のいわゆる横の関係にある。

自然は生物や無生物の単なる寄り合いではない。共に融合し統合され、そこに調和としてのオルガニズムがある。自然保護のためには、自然のつり合いや、自然のしくみ等を充分調査研究した上で、自然と人間を一体としたヒューマンの厳さと、その美しさに耳を傾けるべきであろう。この任務と責任は誰が負つたらよいのだろうか。

(新潟大学教育学部助教授)

式土器を出す遺跡として、刈羽貝塚、中魚沼郡馬返り遺跡、柏崎市小湊遺跡がある（中村1966）。この他、魚沼地方からの採集資料の中に黒浜式類似の土器片が知られている（註2）。

前述の土器片は、前述の諸要素から、布目遺跡、室谷洞窟出土の前期初頭の土器に比定されるのであろう。加茂地方からの前期初頭の遺物が発見されたことは知られていないので、今回ここに取りあげてみた。

最後にこの小文を記すにあたり、多数の人々から御教示を頂いた。特に心よく資料を提供された岡田辰一氏、また後輩の三条商業高校社会科クラブの五十嵐信宏・丸山喜一郎・岡田栄子君からは協力を頂いた。また長岡科学博物館の中村孝三郎先生、新潟市立工業高校中島栄一先生には常日頃から御教示を得ている。ここに併せて感謝の意を表わしたい。

註1 「日本の考古学II 縄文時代」（鎌木義昌編1965）

の編年表では縄文前期初頭の標式土器とされている。一方、中村氏は編年表によれば、室谷洞窟三層上出土の土器をこれに比定している。

註2 先年、金子拓男氏の御好意により実見させて頂いた資料の中に含まれていた。

参考文献

上原甲子郎（1956）「弥彦角田山周辺古代文化遺跡概観」新潟県文化財年報第一集、鎌木義昌編（1965）「日本の考古学II 縄文時代」、清野謙次（1928）「日本石器時代人研究」——（1969）「日本貝塚の研究」、中村孝三郎（1966）「先史時代と長岡の遺跡」長岡市科学博物館研究調査報告第9冊、中村・小片保（1964）「室谷洞窟」長岡市科学博物館研究調査報告第6冊、室岡博（1966）「頸南」中頸城郡南部学術総合調査報告書、八幡一郎（1958）「刈羽貝塚」北方博物館研究報告第一。

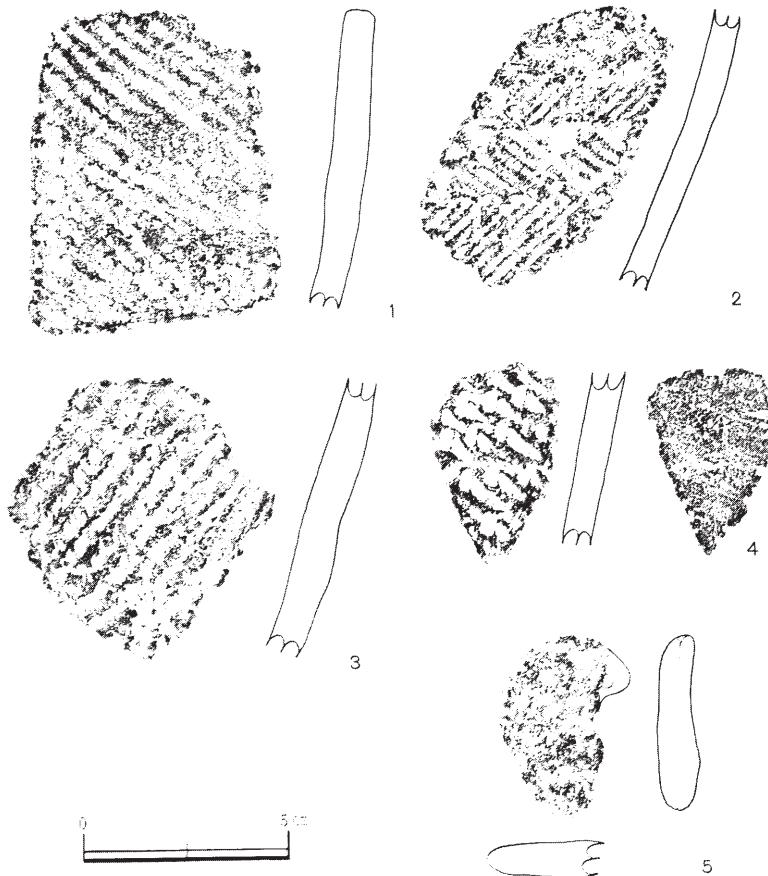


図1. 採集した土器

“渡り”の意味

デビット・ラック (英国の鳥類学者) 1952年にラジオ放送したもの訳である。—19号のつづき—

動物研究室 柿沢亮三

「渡り」は、動物たちの沢山の他の習性と同じく、自然選択によってつくられたに違いない。というのは、動物たちにとって、生存価値がなければ、それ程までに大規模に移動することなどありえないから。この見方を考えると、イギリスの鳥が秋に南方へ渡りをすることは、冬期イギリスにとどまつたよりも、渡りをしたものの方が、生存率が高かったというふうに進化してきたのであり、また逆に、冬でもイギリスで餌をとることのできるカラ類・キツツキの仲間のように渡りをしない鳥の習性は、たぶん、渡りをする危険よりも、冬期イギリスにとどまつた方が、ずっと生存率が良いというふうに進化してきたのだと思う。留鳥のうちのある種、たとえばウタツグミは、個体群のある部分は渡りをし、そして残りのものはイギリスにとどまる。この事は、ウタツグミにとって渡りの危険と冬のきびしきが、ほとんど同じであることを意味している。この考えを支持するものとして、ウタツグミは、冬の比較的おだやかなイギリス南部からよりも、冬のきびしい北部からの方が、沢山の個体が渡りをしている。渡りをする個体の割合は、状態の変化によって変動する。また、フィンランドでは、冬になってもとどまっているズアオアトリとゴシキヒワの割合は、1920年代・30年代のおだやかな冬の続いた間に、徐々に増加した。しかし、1940年代のきびしい冬の続いた後の今日では、非常に少数のものしかとどまっている。たぶん、冬にもとどまる習性の鳥は、ほとんど全滅してしまったからであろう。そこで、私は次のように考える。南方への渡りは、もし冬の間とどまつたら、食物の欠乏によって生存できないような種類の鳥に進化してきたと。しかし、食物の不足は、南方へ渡った鳥が春に帰つくることを説明できない。なぜツバメやムシクイは、夏になんでもアフリカにとどまつてないのだろうか? この間に答えるのは非常に難かしい。しかし、私は次のように考へていて、北方への渡りは、もし北へ繁殖しにきた個体の方が、南でとどまつて繁殖した個体よりも、沢山の子孫を残したような種類の鳥について進化してきたと。北国は、多くの鳥類にとって、好条件の繁殖状態にある。そして北国で繁殖する鳥類は、一般に熱帶の類縁種よりも、沢山のヒナを育てる。この説は証明されてはいないが、理屈に合っているように思われる。

渡りが、自然選択によって生じたという論証は、他の動物たちにも同様に、あてはめることができる。長年のあいだアカタテハやキチョウが、春に南からイギリスへ飛んでくるのは、単にそれらのチョウとイギリスで生まれた子孫を死に導びくだけであると考えられていた。すなわち、それらのチョウの北方への飛翔は、南方での増えすぎたため、あるいは、それらのチョウが、永続的に生存できない地域へ、種の分布域を拡げようとしたむだな試みと考えられていた。しかし鳥と同様に、チョウの渡りは、無意味であるとするには、あまりにも規模が大きすぎる、チョウの大移動は、吹雪にたとえられる程度である。チョウの渡りは、特に熱帯に多く見られる。チョウの移動の権威であるウイリアムス博士が、東アフリカに住んでいた時、あるチョウが、一年のうち222日も渡りをしていたのを観察している。これは、ほとんど3日のうち2日の割合である。ウイリアムス博士は、次のように考えた。このようなチョウの移動には、生存価値があるに違いない。チョウが春に東アフリカに北上していくことが、もしも、単にそうする個体が、死滅する結果となるのならば、渡りの習性は、その種では消去してしまっているだろう。この考えを確かめるために、彼は、春の移動と逆の、秋の南への移動を集中的に搜査のために、調査隊を編成した。そして実際に秋の移動を見つけていく。イギリスでは、このような秋の移動は、春の移動ほど顕著ではない。しかし、チョウは決してむだなことをしているのではなく、個体数の生存率を増加するために、渡りをしているという説を十分に裏づけている程の規模で、チョウの渡りは、定期的に行なわれている。また更に、1950年の秋、ヨーロッパ南部で私と妻が観察した、このような南へ帰っていく渡りは、非常に顕著なものであった。私たちは、チョウだけでなく、トンボや何百万というハナアブが、ヒレネー山脈の高い峰を越えて、南へ流れるように下っていくのを観察した。

渡りに損失はつきものである。毎年秋になると、珍らしいムシクイ類とか渉禽類や他の種の鳥が、コースをはずれて、イギリスへ迷ってくる。実のところ、科学とは異った鳥類学の楽しみとしては、これらの生存闘争に失敗した鳥を観察したり、記録することに多大の関心をはらう。しかし、このはぐれた鳥たちは、自然選択の自然のままの実験材料となり、時にはその結果は、うまくそ

の種の新分布地となる。このようにして、100年前には、クロビタキ (Black Redstart) はイギリスでは、まれな迷鳥だった。しかし、コンディションが、その鳥にとって良好になったためか、冬をイギリスで越す個体が南部沿岸では、ふつうの種になった今日まで、徐々に増加した。実際、最近では、とどまつ繁殖する個体もある。渡りのルートと越冬場所が固定しておらず、コンディションの変化に応じて、それをいくぶん変更するような、他の鳥での例を私はあげることができる。渡りの起源を氷河期であるとする説は間違いであるが、氷河期には、渡りのしかたは大きく変化させられたし、また、それ以後今日まで、徐々に変化してきていることは確かである。

渡りが自然選択の結果であることは、わかりきったこととしても、しかし、それだけでは、どのようにして鳥が、一年のうちの正しい季節に渡り始めるのか? また、どのようにして正しい場所に到達するのか? という事柄は、説明されない。これに答えるには、たとえば、鳥が渡り始める時には、何がそうさせるのか? というような「なぜ鳥は渡るのか?」という第2の問を持ってこなければならぬ。夏鳥は、冬の始まる前に、イギリスから去り、そして、同様に、ヒナを育てる事のできる季節のすぐ前に、イギリスへ帰つくると、私は前に述べたが、このような環境の変化を予見する能力は、鳥とその他の渡りをする動物に、特有なものである。そのことの利益は、明らかであるし、その事実は、普通のできごとであるので、私たちは、それがいかに驚くべきことであるかを、忘れてはいる。ツバメは、どのようにして秋に冬のくるのを知るのだろうか? また、どのようにして、春にイギリスへくるために、アフリカを出発する時期を知るのだろうか? サケやトンボは、どのようにして、その渡りの時期を知るのだろうか?もちろん、このような動物たちが、自分たちは何をしているかという、究極的な理由を知らないことは、事実である。同様にタイミングの問題は、鳥類や他の動物たちの非常に多くの習性、特に繁殖に関する習性にもちあがつてくる。これらの習性のうちのあるものは、ホルモンによって調節されていることが知られている。ホルモンというのは、血液中の化学物質で、日長とか温度というような、外界の変化や鳥自身の体内の状態という両方の刺激によって作られる。渡りの衝動は、たぶん一つあるいは二つ以上のホルモンが、関連しているらしいが、詳細はわかっていない。私はここで、渡りの衝動は、突然おこるのでないことを、つけてくわえておく。

移動する鳥は、出発する前に数日をついで、懸命に餌をとり、そして脂肪をたくわえる。渡りをする昆蟲

もまた出発する前に、脂肪をたくわえる。そこで動物たちは、渡りをする状態になるのだが、すくなくとも鳥に関しては、天気が渡りをしやすい状態になるまで、実際に出発しない。鳥たちは、ふつう安定した高気圧の時だけに、飛びたっていく。ここにまた、このことがどのようにして解るのかという問題がおこってくる。

最後に、どのようにして渡り鳥は、その渡りのコースを見つけるのかという、大きな問題について述べる。伝書バトは、すでに自分の知っている場所へ帰る道を捜すのだが、若鳥やチョウの渡りは、前に行ったこともない場所へ向って出発するのである。その場合、ほとんどの種では、若鳥は親鳥に導びいてもらうことはないだろう。どのようにして若鳥たちは、渡っていく方向を知るのだろう。また目的地についたとわかるのだろうか。渡り鳥はそれを本能で知るのだと言ってしまうことは、長い間の謎を説明することにならず、単に類別したことにしかならない。本能的という言葉の意味は、ある行動が生まれつきか遺伝によるものであって、経験によって学んだものでないということである。だから本能という言葉では、鳥がなぜそうするのか? ということを説明できない。電気や磁気の変化によって、渡りのコースが決定されるという説は、ほとんど確実に除外することができる。最近の実験では、渡り鳥のホンムクドリは、太陽の位置から方向を決めることがわかった。また、一日のうちの太陽の位置の変化も補正できることがわかった。昼夜渡りをしたり、飛んで、あるいは泳いで渡りをする動物での方向決定の問題は、それだけでも一つの課題である。

私はここで、渡りの習性の見事な進化のうちには、第1には、鳥が脂肪をたくわえ、そして正しい時期に出発するというタイミングの機構。第2には、飛翔するのに適した天候状態を知る能力。第3には、方向の知覚。第4には、渡りの距離感覚が含まれており、これらのすべてが生まれつきの能力で、このような能力は、若鳥や昆虫が同じ種の仲間に先導されなくても、未知の目的地に向って出発する時には、効果的に展開することについて、上に述べてきたことで十分示したことと思う。このような状況下でのみ、動物は正しい時期に、正しい場所へ到達できるのであろう。さて、渡りが、自然選択の産物であることに、私たちはますます驚きと嘆賞するのです。

(おわり)

— 第2回 (1969) 昆虫相調査のまとめ —

小木ノ城の昆虫(2)

昆虫相をしらべる会

(5) ツマグロヒョウモンとメスアカムラサキ

ツマグロヒョウモンは、山頂一帯で1950年(昭和25年)に13♂ 1♀ (山崎, 1951) が、また、メスアカムラサキは、1965年(昭和40年)に山頂で1♀ 採集(樺熊, 1967) されたことがある。

今回は、両種とも見つけることができなかった。ツマグロヒョウモンの食草はスミレ類で、メスアカムラサキはスペリヒュを食べるといわれる。しかし、この2種の場合も、その報告の前後に全く発見されていないことや、今回の調査結果などから、やはり、一時的な分布(その年限り)と考えるべきであろう。

7. 地理的変異の問題

変異度の高い3種のチョウ類について考えてみたい。

(今井隆治, 永井道雄)

(1) ダイミョウセセリ (図2)

福井県の中北部—三重県の中北部以南のものは、後翅にあきらかな白帯があり(関西亞種), それ以北のものは白帯がうすくなる。日本のダイミョウセセリは、大きくこの二つの地方型に分けられている。

ところで、長岡市立科学博物館にある佐渡島産4♂ 2♀(の)標本を見ると、この白帯がほとんど認められない(本州から隔離保存された眞の古型か)。この型のものは本州の山地にも分布する。一方、本県の海岸地帯では、白帯がかなりよく現われる傾向がみられる。

小木ノ城産は、変異の巾が大きく、それが強く現われるものから、佐渡型(仮称)に近いのまで多様であることがわかった。これは、おそらく、この地域が、山地型と海岸型とが交りあう地帯に位置しているためではないかと思う。



図3. ダイミョウセセリのさなぎ

(採: 永井道雄, 山頂で, 1969年7月)

(2) ウスバシロチョウ (図2)

城址頂上の北東側斜面に多い。また、中永トンネル方面から草生津部落を見おろせるところへ出て、間もなく道路が大きく内側にカーブしたところの上方にあるちょっとした草地にも大発生していた。この二つの産地から羽化したばかりの210♂ 34♀ を採集した(図2)。

この種は、大きさや斑紋の濃淡に地方ごとの特徴をあらわすことで有名である。小木ノ城の二つの産地のものは、東蒲原・北蒲原地方のものや、魚沼地方のような黒味が強く(仮称—越後型)なく、大きく明るい弥彦・真木型(仮称)に含めてよいようである。なお、これらの標本は、そのうち前翅長などを計り統計的な見方をしてみたいと思う。

(3) イチモンジチョウ (図2)

昨年(1968)調査した千本平では、白紋が退化する個体が多くえられたが、小木ノ城産にもかなりこの傾向がうかがわれる。この傾向は、西山丘陵一帯の昆虫相を特徴づけるもの一つにあけられると思う。

8. その他注目すべきチョウ類

私たちがぜひ見たいと思っていたチョウのうち、南方系種をのぞいた残りと、この山で初めて採集された種について少し書いておく。(小林篤, 白井正善)

(1) キンイチモンジセセリ

山頂下の登山路で5月18日のとき 4♂ 1♀ 採れた(採: 今井哲郎1♂, 白井正善2♂, 樺熊清治1♀)。

小木ノ城には山崎久夫さんが採集した報告(樺熊, 1955)がある。新潟県では、今までに小出(中村, 1925), 妙高(荻野, 1943), 三国(荻野, 1950), 小千谷発電所近く(南雲, 1970)などの産地が知られているが、すんでいるところはあまり広くないといわれている。

(2) ギフチョウ

私たちは採集できなかつたが、5月18日のとき、山頂でいっしょになつた西越高校の生物部の人たちから、4月29日に約10頭採集したことを聞いた。荻野(1960)も報告しているから、この山にはあん外たくさんいるのではないかと思う。

(3) オオムラサキ

荻野(1960)も観察しているし、エノキの大木もあるので、きっと採れるだろうと期待していた。7月28日のとき山頂で1♂ 2♀ が採集された(採: 大瀬庄市1♂,



図4. オオムラサキの♀を採った白井正善君(左)と
鷲尾ゆうじ君(山頂で、写真)。小林篤1♀、白井正善1♀。

(4) 小木ノ城で初めて採れた3種

a エソスシクロチョウ、7月28日、1♂3♀ (採:白井正善1♀、植熊清治1♂2♀)

b アサギマダラ (NKH, No.19, P.8)

c オオウラギンスジヒヨウモン、7月28日、1♂5♀ (採:小林篤1♂1♀、小黒宏2♀、佐藤山樹1♀、大瀬庄市1♀)

9. トンボ・セミ・甲虫類

小木ノ城のチョウ類を直接あつかった報告は5編をかぞえられる。しかし、そのほかの昆虫は、これまで全然知られていないかった。それで、ほとんど普通種ばかりであるがリストアップしておく(表3)。また、その種の出現期がだいたい推定できると思われる所以、各回ごとに採集個体数をあげておく。(渡辺修、小黒宏、鷲尾ゆうじ)

10. まとめ

小木ノ城には、アオバセセリ、アオスジアゲハ、アサギマダラなどの南方系種が多いことがたしかめられた。しかし、これらの種は、ほんとうにこの地域にすみついでいるのか、どうか疑わしい。むしろ、地形的、気象的、植物相などの要因が、この山頂を集合しやすいところにしているからなのであろう。

また、エノキの葉だけを食べるオオムラサキやゴマダラチョウが多く、サンショウを食べるアゲハチョウのなかまが群飛することなども、食草が十分にあることのほかに、このような地形的、気象的環境が優れているためと思われる。

近年、この山頂の自然環境は、南面がひどく破壊されてしまった。そのため、かつてはうっそうとしていた見事な樹叢も、いちじるしくいためられ、枯死する老樹が目立つようになった。特に東面から南面に植生の変化が見られるが、この状態は、やがて反対側にまでおよぶ

ことも考えられる。本県では、内陸における数少ない暖地系要素の濃い山であつただけに残念である。

このレポートは、不十分ながら一応小木ノ城の現状を知る目やすにはなったと思われる。そして、現に進行しつつある生態系の変化に、さらに追い打ちをかける結果になるような開発が、今後、企画されることがないよう折りたい。それが私たち本年度会員の一一致した気持ちであることを付け加えておく。(今井哲郎、郡司哲三、植熊清治)

引用文献

- 1) 馬場金太郎 (1967) モンキアゲハの採集例. 越佐昆虫同好会会報, (36): 25
- 2) 植熊清治 (1967) 新潟県に迷入したメスアカムラサキ. 越佐昆虫同好会会報, (36): 18-20
- 3) 萩野誠作 (1950) 東山と西山の蝶相. 越佐昆虫同好会会報, 4(1): 7-12
- 4) ——— (1960) 小木ノ城を中心とした昆虫. 小木ノ城を中心とした自然環境の研究(三島郡理科教育研究会), 37-50
- 5) 山崎久夫 (1951) 中越地区のツマグロヒヨウモン. 越佐昆虫同好会会報, 5(1): 11-13
- 追加 6) 白水 隆 (1965) 日本の蝶(東京:北隆館)
- 7) 植熊清治 (1955) 新潟県の蝶. 長岡市立科学博物館シリーズ, (1): 1-13
- 8) ——— (1964) 生物地理学的に見た粟島の昆虫相. 長岡市立科学博物館研究報告, (3): 1-132
- 9) 南雲 保 (1970) 小千谷市山本山のギンイチモンジセセリ. 越佐昆虫同好会会報, 40: 43-44
- 10) 中村正雄 (1925) 新潟県天産誌(新潟:中野財团)
- 11) 萩野誠作 (1943) 新潟県上越地方の蝶. 昆虫界, 11(109): 125-136
- 12) 昆虫相をしらべる会(1969)千本平の昆虫(2)NKH, (16): 6-8



図5. 雪国だけにいるマガタマハンミョウ

(採:植熊清治、登山路で、写真)



略年譜

本籍：三島郡与板町大字与板乙6089

出生：明治35年6月20日，**学歴：**与板尋常高等小学校高等科卒業（大正7年3月），**表彰：**鳥獣の研究を指導（長岡市長：昭和26年），鳥類保護と鳥類研究（日本鳥類保護連盟、昭和34年），鳥獣研究（新潟県知事、昭和36年），**略歴：**長岡市立科学博物館鳥獣専門部長（昭和26年），同顧問（昭和29年），同嘱託（昭和37年），同顧問（昭和39年～）。**逝去：**昭和46年1月29日。享年68才。**主な業績：**原因不明の斃死鳥（鳥学会昭和29年、鳥・13巻P13～64）、ヒルを食べるカルガモ（日本野鳥の会、昭和29、野鳥・19巻2号P15～18）、新潟県の野鳥相（長岡市立科学博物館、30.博物館研究シリーズNo.2、33PP）、新潟県の野鳥（新潟県野鳥愛護会、30. P1～34. P93～96）、新潟県下の珍鳥の渡来（鳥学会、32. 鳥・13巻P55～56）、新潟県の野鳥（新潟県農林部、37. 35PP）、新潟県鳥類棲息調査（新潟県農林部、280PP）そのほか多数の鳥類に関する研究報告がある。

密着接近と融合が感じさせられるのであった。長岡科学博物館では、野平、稻田、吉原の諸氏がすでに死去し、またここに千羽氏を失って、研究室も時代的な転換期に入っている。博物館の生命線は研究室にあり、研究室は博物館の心臓でもあろう。研究室が怠眠をむさぼれば展示は魅力を失い、人心は離れてゆくきびしさにある。死去された先輩諸氏には個性的な各自のタイプがあった。しかし其通したものは婆娑の風に超然とした強い不屈の根性であった。それが創立期の貧乏博物館を支えていたのであろう。ここに謹んで先輩諸氏の労を感謝し、その冥福を心から祈りたい。

人鳥一如 千羽元一先生

新潟県野鳥愛護会 植木久米雄

「それ、オオルリが鳴いた」「それ、今のがホトトギス」かすかに聞えるのがツツドリと次から次と鳴く野鳥の声その姿をいち早く捉えて山野にいた、れた先生を失ってしまった。先生は鳥の話となると、打出の小槌のようにやむことなく野鳥の申し子の如く続けられた。45年前に出版された新潟県天産誌（1925・中村）記載野鳥196種の追加更正是私の行脚で、我一代でならずは親子二代と決意されたのか、御子息さんも引きいれて時に銃を肩に広く調査されて、1962年277種の新潟県の野鳥の分布生息渡りを立証された。この書が1967.8年と更に追加されて本県野鳥は325種となる。この148種の追加更正是先生中心にした本間、風間その他のスタッフの協力でおこなわれたが、この業績は先生の人となり一人鳥…如すべて野鳥のためにということであつたものである。

カケス飛ぶ杉の梢や動く雲

千羽元一氏の死去に憶う

長岡市立科学博物館嘱託 中村 孝三郎

1月29日～。千羽氏の葬式の日は小雪のチラツク寒い風の日であった。

私が千羽氏を知ったのは、かれがまだ新聞記者をしていた頃からで、その後昭和25年の秋、長岡科学博物館創立委員会で顔を合せたときは、二人ともその奇遇を笑い合った。その翌年悠久山公園に科学博物館が建設されたが、当時は今のように四つの研究室が設置されないで、現在の考古研究室で、野平安芸雄博士、稻田豊八、千羽元一の諸氏と私が、一つの部屋で寄り合い所帯でやっていた。みんなが自己の担当面で熱心に仕事をしていたが、時には専門分野の異なる人々の研究をいろいろ話し合ったりした。博学と、意欲の激しい顔ぶれなので、懇々たる意見や、珍談が絶えなかったことも今は懐しい想い出となる。

その頃の千羽氏は、標本不足を補うために、さかんに鳥の剥製をしていたが、夕方になると研究室の火鉢で鳥の肉を焼いてみんなによく試食させた。スズメ、ツグミ、ウズラ、ウソ、アオサギなどの多くの鳥を、食べる前に鳥名を伏せておいて、食後に鳥の名を当てさせたり、また細かい味覚の違いなどを話すのであった。稀には猫の肉を食わされてみんなで大騒ぎしたことわざった。かれは野鳥については、実に驚くほどのいろいろのことを知っていた。それは永い歳月かけた足による独学の知識であった。アマチュアが専門家になるためには人知れない苦勞があり、半面そうした人にはなんともいえない暗いかけがりがどこかにつきまとるものであるが、かれは樂天的で、終生明るかった。若い頃には酒も飲んだようであるが、研究室生活ではあまり酒を飲まなかつた。そしてそこにみいだされるものは、晩年にかかる静かな心境の中で、精いっぱい生きたものだけが味わえる安らかな境地にあったようで、越後の山河と、そこに群れ空を翔ける野鳥や生物への、よりつよい精神的な

密着接近と融合が感じさせられるのであった。長岡科学博物館では、野平、稻田、吉原の諸氏がすでに死去し、またここに千羽氏を失って、研究室も時代的な転換期に入っている。博物館の生命線は研究室にあり、研究室は博物館の心臓でもあろう。研究室が怠眠をむさぼれば展示は魅力を失い、人心は離れてゆくきびしさにある。死去された先輩諸氏には個性的な各自のタイプがあった。しかし其通したものは婆娑の風に超然とした強い不屈の根性であった。それが創立期の貧乏博物館を支えていたのであろう。ここに謹んで先輩諸氏の労を感謝し、その冥福を心から祈りたい。

あとがき：自然の破壊が進み、そのしわよせが学問の領域にまでおよび「動植物の採集はいけない」という声を時々耳にします。しかし素手の人間がどれほどの自然界のバランスを乱すというのか、それよりも、動植物の標本を作ったり、育てたり、生きたものを生きた姿でとらえ、見たりさわったりする中から知的な好奇心が芽ばえ科学的な思考力がはぐくまれていくことに価値を見いだしたい。肌で感じた自然とのふれあいは忘れるものではなく、今号1ページの「自然のしくみ」にもあるように自然保護の重要性の認識にもつながるものと考えます。自然界から引き出したどんな小さな知見でも大切にしたいものです。ご投稿ください。（西山）

N K H（長岡市立科学博物館報）No.21

昭和46年9月25日発行 ￥50 円25円

編集・発行 長岡市立科学博物館
(長岡市悠久山公園内)

印 刷 所 株式会社 三秀社
(長岡市宮内6丁目)